

論 説

アダム・スミスと生産的労働

頭 川 博

目 次

はしがき — 問題の所在

- 1 資本主義の生産的労働概念
- 2 スミスによる生産的労働の二つの規定
- 3 二つの規定の混同理由
- 4 先行研究の批判的検討

む す び

はしがき — 問題の所在

マルクスによれば、資本主義での生産的労働をもって資本を生産する労働と規定した功績は、アダム・スミスに帰属する。「ここでは、生産的労働は、資本主義的生産の立場から規定されており、A・スミスは事柄そのものを概念的に論じつくし、その本質をついている、——かれが生産的労働を直接に資本と交換される労働として規定していること、…これこそは、A・スミスの最大の科学的功績の一つである。」(Mehrwert, MEGA, II/3・2, S. 443, 圈点—マルクス) スミスは、剰余価値を貨幣でとらえる重商主義や農産物でとらえる重農学派とは一線を画して商品でつかみ、価値にもとづく生産形態としての資本主義の理解から生産的労働の概念を的確に規定した。ところが、不思議なことに、スミスは生産的労働とはなにかを規定する同じ文脈のなかで、資本を生産する労働があたかも商品を生産する労働と同一であるかのようにいいかえ、生産的労働にたいして二つの相異なる定義をあたえた。資本主義の生産的労働

とはなにかを論じるスミスにあっては「第一の正しい規定」(*Ibid.*, S. 439)と「第二の誤った見解」(*Ibid.*, S. 442)とが同じ文脈のなかに併存している。そこで、経済学史上はじめて資本主義の生産的労働概念を定立しえたスミスが、なぜ同じ箇所では二つの相異なる規定を並立させるほど深刻な混同をおかしたのかというごく自然な疑問がうまれる。生産的労働の第二規定である商品を生産する労働は、独立生産者の場合がしめすように、必ずしも資本を生産する労働ではないからである。商品を生産する労働は、それ自体としては労働の資本主義的規定性を内包していない。ところが、先行研究にかんするサーベイによれば、スミスがなにゆえ二つの相異なる規定を同一視したのかその真の理由のほりさげた分析が提示されていない。先行研究では、なるほどスミスの第二の規定が第一の規定と齟齬をきたすとみるマルクスの分析を承認したうえで、スミスにおける商品生産と資本主義的生産の混同が指摘されるころまでは正しい¹⁾。しかし、スミスがなにゆえ両者を同じ生産形態とみなしたかその必然的根拠にまでたちいった本格的な論証は存在しない²⁾。スミスによる生産的労働の二重規定の混同問題には、中間のコンマはあっても、まだ最終のピリオドはうたれていない。

それゆえ、本稿の課題は、マルクスによるスミス批判の基本線にそくして、スミスが生産的労働の二つの規定を区別しない根本原因をつきとめることにある。本稿によって、経済学史というせまい一領域に属するかに映じる生産的労働の二重規定にかんする論点は、じつは、剰余価値の秘密とはなにかという問題と同じであることがあきらかになろう。

- 1) たとえば、金子ハルオ『生産的労働と国民所得』日本評論社、1966年、第1章参照。
- 2) 以前スミスによる生産的労働の二重規定にふれたさい、その混同理由を商品生産と資本主義との同一視でもって満足する浅さをのこした(拙稿「資本の価値増殖と生産的労働」『一橋論叢』第109巻第6号、1993年 所収)。本稿は、社会的分業と工場内分業のスミスによる混同理由についてのその後の分析を準用して研究上の負債を穴埋めするところみである。石についたこけのように仕事にうちこんだマルクスの「学問には平坦な大道はない」(*Kapital*, I, S. 31)という金言は、スミ

スによる生産的労働論の克服一つにもあてはまる。論点一つの詰めも砥石のようになめらかな一本道ではない。

1 資本主義の生産的労働概念

本節では、スミスによる生産的労働の二つの規定を議論するさいの軸点として、マルクスが最終的にルールをしいた資本主義での生産的労働の概念を再構成する。

社会が再生産される根本的な条件は、労働力の生産的発揮による労働支出にある。人間にとって生命の特有な発現とは、労働力の発揮そのものだからである。「労働力の支出」(*Ibid.*, S. 61)を「正常な生命活動」(*Ibid.*)ととらえるのはマルクスの根本思想の一つである¹⁾。ところが、労働力の発揮は、それが実現される労働過程の内部でも外部でも例外なく、物質的財貨の存在なしには成立しない。いま労働力の発揮の典型例として生産活動を取りあげれば、まず第一に、その労働力の発揮は、労働過程の内部では、物質的財貨である生産手段の存在なしには実現されない。物質的財貨を形成する労働過程は、それが具体的有用労働の支出からなるかぎり、特定の具体的な属性をもつ生産手段との接触をつうじてはじめてなりたつ。豆腐の製造は、大豆やミキサー・布袋などの特定の生産手段を使った労働力の合目的な実現によってのみ可能になる。第二に、労働力の発揮は、単に労働過程の内部で物質的財貨としての生産手段を前提するのみならず、その外部での生活手段という形態にある物質的財貨の存在を不可欠の条件とする。けだし、労働過程内部での労働力の実現は、生活手段の消費によるその再生産のうらづけによってのみなりたつからである。マルクスが「客体的な労働条件(生産手段)」(『直接的生産過程の諸結果』国民文庫、岡崎次郎訳、473[原]ページ、圈点-マルクス)にたいして「主体的な労働条件(生活手段)」(同ページ、圈点-マルクス)と規定するように、労働力の発揮は、労働過程の内部でも外部でもひとしく物質的財貨の存在を前提になりたち、生産手段も生活手段もともに労働力の実現条件を形成する。しか

し、物質的財貨を生産する労働過程のみならず、具体的有用労働を提供して人間自身に直接働きかけるサービス労働の支出それ自体もまた、物質的財貨としての生産手段なしにはなりたない。たとえば、教師は、本やテレビ・ビデオなどで授業のネタを仕入れ、黒板とチョークを使い、パソコンやビデオ・パワーポイントまで導入して学生の関心をひきつけ学習効果を高めようと試みる。まさに、サービス労働は、特定の物質的財貨を媒介にしてのみ合目的に支出される。しかも、物質的財貨は、サービス労働が支出される労働過程の内部において必須要件をなすのみならず、その外部で労働者の消費にはいり労働力の再生産に役だつ。総じていえば、物質的財貨は、生命力の發揮たる労働支出の絶対的な要件であるため、それを生産する労働は、生産形態のいかに関係なくあらゆる社会に普遍的な生産的労働を形成する。マルクスが物質的財貨を生産する労働をもって超歴史的な労働過程の観点から「生産的労働の本源的な規定」(*Kapital*, I, S. 531 f.)と命名するゆえんはここにある。

ところが、資本主義で物質的財貨は、資本家の排他的な所有に帰属するその固有な富にほかならない。そこで、一つの独自の生産形態である資本主義ではその本源的規定とはちがった生産的労働の特殊歴史的な規定をあたえる必要性がうまれる。資本主義での生産活動は、物質的財貨が資本家の排他的所有に帰属する関係上、資本を生産する労働として実現されるからである。つまり、「資本主義的生産様式一般は労働者からの労働条件の収奪を前提する」(*Kapital*, III, S. 627)というように、資本主義的生産では、社会的富は資本家の排他的所有に帰属するがゆえに、生産手段と生活手段とからなる物質的財貨の存在を前提する生産活動は、その両者を素材的実体になりたつ資本の自己増殖のためにいとまれる。資本による剰余価値の創造とは、労働者に対立して資本家の排他的所有に帰属する物質的財貨そのものの自己増殖にほかならない。いうまでもなく、賃労働者の前身である独立生産者の場合、生産条件の所有に起因してその再生産には生産規模の拡大も含まれ、蓄積財源のための労働支出を内包した労働日全体が労働者の再生産に要する必要労働を形成するから、剰余価値は生産されない。資本の再生産といえば、それは単純再生産ではなく拡大再生産にひとしいのと同じように、独立生産者の場合、生産条件の所有を

一つの基本契機とするため、その再生産は蓄積を含む。あるいは別の面からみれば、剰余価値は新価値のうちの前貸価値をこえるその超過分であるが、独立生産者は、生きた労働支出のために価値を前貸しせず自分の労働力を消費するから、付加価値を形成するが剰余価値をうまない²⁾。これに反して、賃労働者の場合、その再生産が生産条件からの分離によって労働力だけのそれ限定される結果、必要労働分量が圧縮作用をうける一方、労働力の1日の使用権をもつ資本家によってその必要労働分量をこえて労働日が延長されるという正反対の方向性をもつ二面的な運動にもとづいて、剰余価値が生成する。剰余価値は、生産条件の労働者からの分離による対立的な生産関係の特有な所産にほかならない。ここに、剰余価値論の天空を社会的生産関係という光芒できりさいたマルクスのブレイクスルーがある。したがって、剰余価値は賃労働者の独自の社会的果実であるから、「直接に剰余価値を生産する労働」（『直接的生産過程の諸結果』、480 [原] ページ、圏点-マルクス）という表現は一義的に資本主義特有の生産関係をしめし、資本主義での生産的労働の規定になる。マルクスの場合、生産的労働と資本主義的生産関係とのリンクは、剰余価値の独自の歴史性によって担保される。その意味では、資本主義での生産的労働の規定は、剰余価値の秘密の正否を検証する試金石として機能する。もし剰余価値が賃労働者以外からもうまれるとすれば、剰余価値をうむ労働という表現はそれが支出される特定の社会的生産関係³⁾をしめさず、資本主義に固有な規定にはならないからである。マルクスにあつては、敵対的な生産関係による貨殖の秘密とその生産関係をさししめす生産的労働の概念とは同じコインの両面にあたる。生産関係によって剰余価値生成がとかれるため、生産的労働概念はその労働が実現される特有な生産関係をしめす。だから、資本主義に特有な生産的労働といえは、それは、単に物質的財貨をつくる労働ではなく、資本の自己増殖に役だつ労働にほかならない。「生産的ということの資本主義的な意味——剰余価値を生産すること——」（MEGA, II / 3 · 3, S. 763, 圏点-マルクス）。生産的労働は、社会的富が資本家だけに帰属する資本主義では、物質的財貨をつくる労働というその本源的規定から、物質的財貨を素材の実体とする資本の自己増殖に奉仕する労働へと転化する。「労働能力にたいして自立化した対象

的労働のその価値を維持し増加させる労働が、生産的労働である。」(MEGA, II / 3・6, S. 2168, 圏点-マルクス) ちなみに、資本家は、生産活動を営むかサービス労働を提供するかの事業内容の相違には無関係に労働者の対極にたつ階級として物質的財貨を独占的に所有するのだから、資本家のもとでの労働はすべて、それが資本の自己増殖に役だてば、生産的労働という規定をうけとる。

ひるがえっていえば、生産的労働の本源的規定とその歴史的規定との関係いかんという係争問題は、超歴史的な富としての物質的財貨の資本家による排他的所有への移行の問題に還元される。労働過程次元上で生産的労働とはなにかが問われるさいには、労働力が合目的に発揮される関係だけがここで対象になるから、物質的財貨の所有関係は度外視される。これに反して、資本主義では、物質的財貨の所有関係は度外視される。これに反して、資本主義では、物質的財貨は資本家の排他的所有に帰属するから、物質的財貨の生産的にして個人的な消費をとまなう労働力の支出は、資本家のもとで事業経営として営まれる。つまり、労働過程から資本の生産過程への上向にあっては、労働力の実現は、物質的財貨の存在だけを前提する問題から、その所有関係に左右される特定の社会的な規定性をおびた問題へと転化するため、生産的労働は、その本源的規定から歴史的規定への切り替えをとまなう。ついでに指摘すれば、「生産的労働とは直接に資本と交換される労働である」(MEGA, II / 3・6, S. 2171, 圏点-マルクス) とか「生産的労働は直接に資本としての貨幣と交換される」(『直接的生産過程の諸結果』, 483 [原] ページ, 圏点-マルクス) とかいう明言がしめすとおり、資本主義の基礎では、資本家に前貸しされる貨幣は、生産過程で剰余価値をうんではじめて資本に転化するのではなく、流通過程で剰余価値を創造する属性をもつ資本として存在するというのがマルクスの根本的な立場であった⁴⁾。けだし、資本主義の前提上では、貨幣は、剰余労働を創出する属性を生産条件の労働者からの分離によってうみだす労働力との関連で、剰余価値をうむ能力を潜勢的にもつからである。前貸しされるさい、貨幣はすでに剰余価値をうむ属性をもつがゆえに、資本固有の産物として生産過程で剰余価値を創造して資本としての内的な本性を実証する。貨幣は、最初単純な規定性で存在しながら、生産過程で剰余価値という固有な果実をうむ営

みによって資本に転化するというのは、最上級の逆説である。貨幣が流通上で単純な規定性をもつ一方、生産過程で剰余価値をうむというのは、氷に火がつくことはあっても、絶対にありえない。対立的な生産関係がなければ、貨幣は、可能性として剰余価値をうむ独自の属性をもたない。いいかえれば、独立生産者からなる歴史上の単純流通では、貨幣は、潜勢的にも可能的にも資本ではありえない。貨幣が潜勢的または可能的に資本である⁵⁾とは、それに剰余価値創造という歴史上の単純流通ではもちえない高次の属性が帰属することにひとしい。資本主義では、生産条件の対立的な規定性によって、貨幣は単純な規定性をこえる資本であるため、その独自の所産としての剰余価値を創出する。剰余価値とは、資本という母胎がうみだすその独特な自己増殖分である。「資本の本来の独自の生産物は剰余価値である。」(*Kapital*, III, S. 386) 貨幣が資本主義の基礎上でそれ自体資本であるのは、単純な商品生産の基礎上では金が即自的にあらゆる商品の一般的等価物としての貨幣である特有な社会関係と同じである。資本関係の恒常的な再生産がしめすように、資本主義では前提が結果として再生産され、その結果が逆にそのまま前提になる⁶⁾。「貨幣の、一般に価値の、資本への転化が資本主義的生産過程の恒常的な結果であるように、資本としての貨幣の定在もまた資本主義的生産過程の恒常的な前提である。」(*Kapital*, III, S. 392)

以上、本節では、資本主義での生産的労働とはなにかをその本源的規定にさかのぼってときおこした。

- 1) 労働を生命の発現とみなすマルクスの一貫した根本思想は、「労働つまり生命力の支出」(*MEGA*, III/3・1, S. 160)・「労働者の生命の支出である生きた労働」(『直接的生産過程の諸結果』, 468 [原] ページ) という表現にもみられる。
- 2) 「商品所有者は自分の労働によって価値を形成することはできるが、しかし、自分を増殖する価値を形成することはできない。」(*Kapital*, I, S. 180)
- 3) 「こうした(生産的労働の対象化した商品の――頭川)素材的規定は、生産的労働の…属性すなわちむしろただ一定の社会的生産関係を表わすにすぎない属性とは少しも関係がない」(*Mehrwert*, S. 445, 圏点―頭川)「生産的労働者の概念は、…労働者に資本の直接的増殖手段の極印を押す一つの独自に社会的な、歴史的に成立した生産関係をも包括する。」(*Kapital*, I, S. 532)

- 4) 資本主義での生産的労働の規定は、『資本論』第I巻第2篇「貨幣の資本への転化」のテーマを検証する。『資本論』の主要な論点はまるでみえない地下茎のようにつながっている。

『資本論』研究では、ある論点の正否がそれとは一見無関係にみえる別の領域での説明によって実況検分をうけるところに隠されたおもしろさがある。『資本論』研究の別の領域での説明との整合性いかんは、670年焼失をしした『日本書紀』（720年成立）の実否をめぐる法隆寺再建論争での年輪年代測定法を含む多面的アプローチに相当する。生産的労働概念が賃労働者による剰余価値創造の特有性と通底しているのも、『資本論』の含蓄をしめす具体例の一つである。

- 5) 「貨幣（商品）は、資本主義的生産の基礎のうえでは、それ自体で資本である。」（MEGA, II/3・4, S. 1470, 圏点-マルクス）通例、資本としての貨幣は、それが剰余価値を創出する特有な属性をもつ資本として、単純な規定にある貨幣または貨幣としての貨幣と峻別されない弊害がある。もし両者が剰余価値を創出する特有な属性をもつか否かで概念的な区分をうけるならば、『資本論』第I巻第2篇の曲解はリセットされたと推定される。そこでは、G-W-Gの始点の貨幣が「資本としての貨幣」（*Kapital*, I, S. 161）としてW-G-Wの「貨幣としての貨幣」（*Ibid.*）から厳密に区別されているからである。ちなみに、前者は剰余価値を創出する能力が帰属する点で後者と相異なるため、生産的労働と不生産的労働の区別は、労働が資本としての貨幣と交換されるか否かでなりたつ。「生産的労働と不生産的労働との相違は、ただ、労働が貨幣としての貨幣と交換されるか、それとも資本としての貨幣と交換されるか、ということにあるだけである。」（『直接的生産過程の諸結果』, 485 [原] ページ, 圏点-マルクス）
- 6) 「どの再生産においても、どの前提も結果として現われ、どの結果も前提として現われる。」（MEGA, II/3・6, S. 2243）「過程のはじめにその前提および条件として現われなかったものが、その終りに出てくることはできない。」（*Grundrisse*, MEGA, II/1・1, S. 223）ここに、ドイツの病理学者ウィルヒョウ（1821-1902）による「細胞は細胞からうまれる」あるいはパスツール（1822-1895）による自然発生説の否定つまり「生命は生命からうまれる」という自然科学上の大発見に似た社会関係がある。

2 スミスによる生産的労働の二つの規定

前節で、本稿の扇のかなめとしてマルクスによる資本主義での生産的労働概念をその本源の規定からときおこした。そこで、本節の課題は、スミスが資本

主義での生産的労働をもって一方で剰余価値をうむ労働と規定する功績をのこす半面、同時に商品を生産する労働とも二重に規定する典拠をしめして、両者が概念上相異なる規定である事実をとく。

スミスが主著『諸国民の富』で生産的労働の概念を論じるのは、一方での労働生産力の高さとは他方での生産的労働と不生産的労働との割合の二つの要因によって、労働者の物質的状態を改善する社会的富の増大が左右されるという立論による。社会的富の増大を規定する二要因のうち一方の労働生産力の高さが分業を中心に第1編で考察されたあと、ひきつづいて第2編でそれを規定する資本蓄積が生産的労働と不生産的労働の割合の問題として議論される。スミスは、第2編第3章「資本の蓄積についてすなわち生産的労働と不生産的労働について」の冒頭ですばり正當に資本主義での生産的労働とはなにかという規定をあたえる。

「労働には、それが加えられる対象の価値を増加させる (add) 部類のものと、このような結果を生まぬ別の部類のものがある。前者は、価値を生産するのであるから、これを生産的労働 (productive labour) とよび、後者はこれを不生産的労働 (unproductive labour) とよんでさしつかえない。そこで、製造工の労働は、一般に、自分が加工する材料の価値に、自分自身の生活維持費の価値と、自分の親方の利潤の価値とを付加する。これに反し、召使の労働はどのような価値も付加しない。製造工は、自分の賃銀を自分の親方から前貸ししてもらってはいるけれども、こういう賃銀の価値は、一般に、自分が労働を加えた対象の増大した価値のうち利潤をともなって回収されるのであるから、実は主人にはなんの費用もかからない。ところが、召使の生活維持費はけっして回収されないのである。人は多数の製造工を雇用することによって富み、多数の召使を扶養することによってまずくなる。」(『諸国民の富』 I, 岩波書店, 大内・松川共訳, 313 [原] ページ)

ここで、生産的労働は、前貸しされた価値を増殖させ資本家に剰余価値をもたらす労働として「資本主義的生産の立場」(Mehrwert, S. 443) から「労働が実現される一定の社会的形態」(Ibid., S. 444) に即応して規定されている。資本の観点からの生産的労働の規定は、重商主義や重農主義を超越して、

価値の実体を労働にもとめ剰余価値の源泉を資本にやとわれた労働者の生産活動のなかに普遍的にみいだすスミスにあってはじめて到達されえた成果にほかならない。

ところが、「資本の立場からすればなにが生産的労働 (*productive Arbeit*) であるかという問題」(MEGA, II/3・6, S. 2166, 圈点-マルクス)を論じるその同じ箇所、スミスはひきつづいて生産的労働の第一の規定をふえんしてその第二の規定を論じる。

「とはいえ、後者の労働もその価値をもっており、前者のそれと同じように当然その報酬をうけるべきものである。しかしながら、製造工の労働は、ある特定の対象または販売しうる商品に固定され実現されるのであって、こういう商品はこの労働がすんでしまったあとでも、すくなくともしばらくのあいだは存続する。それは、いわば、なにか他のばあい必要に応じて使用されるために、貯蔵され貯えられる一定量の労働である。この対象、またはそれと同じことであるが、この対象の価格は、あとになってから、はじめにそれを生産したのと等量の労働を必要に応じて活動させることができる。これに反し、召使の労働は、ある特定の対象または販売しうる商品に固定されたり実現されたりはしない。かれのサービスは、一般にそれがおこなわれるまさにその瞬間に消滅してしまうのであって、あとになってそれとひきかえに等量のサービスを獲得しうるある痕跡、つまり価値をその背後にのこすことがめったにないのである。」(『諸国民の富』I, 313 [原] ページ)

ここでは、生産的労働の第一の規定は、製造工によって商品に固定される労働といいかえられる。つまり、スミスの第二の規定によれば、材料にたいして消費された賃金に含まれる価値の等価をつけかわえる特定の労働が資本主義での生産的労働だというのである。生産的労働イコール商品を生産する労働という第二の規定は、生産的労働イコール資本を生産する労働という第一の規定と相異なり、資本主義的立場からの脱線がある。商品を生産する労働は、直接的には生産条件の対立的な所有関係に立脚せず、必ずしも剰余価値をうむ労働ではないからである。生産的労働の第二の規定は、「労働者自身が自分の生産条件の所有者であった場合と同じ」(*Mehrwert*, S. 449) である。マルクスに

よれば、独立生産者は、商品の売り手であって労働の売り手ではないため、資本主義での生産的労働と不生産的労働の区別に無関係である。「彼ら（独立生産者——頭川）は、商品の生産者であるとはいえ、生産的労働者の範疇にも、不生産的労働者の範疇にも属さない。」（*MEGA*, II / 3・6, S. 2180, 圏点—マルクス）そもそも「資本主義的生产は、剰余価値の生産である」（『直接的生産過程の諸結果』, 441 [原] ページ, 圏点—マルクス）とか「資本主義的生产——すなわち剰余価値の生産——」（*Mehrwert*, S. 345）とかいわれるように、剰余価値生産こそ資本主義の核心を形成する。商品生産それ自身は、あくまでも剰余価値創造のための基本前提にすぎない。「商品流通したがってまた貨幣流通をその基礎として前提する資本主義的生产様式」（*Kapital*, III, S. 336）。なぜなら、資本とは剰余価値をうむ価値だから、商品流通があつてはじめて剰余価値をうむ主体としての価値がなりたつ¹⁾。一方、単純な商品流通では直接には商品所有者同士が相対するだけで、生産条件の対立的な所有関係は表現されていないからである。マルクスは、資本主義的生产をもって単純流通と剰余価値創造の二契機の立体的な統一からなると理解する²⁾が、ここに単純流通が剰余価値創造にたいしてもつ内面的な関連を読みとるべきである。前者が後者を必然的に内含するとすれば、両者の重層的な統一による資本主義の理論的な再構成は不要である。商品生産と資本主義的生产との区分は単純な商品生産による剰余価値の非創造を支点になりたつ。だから、生産的労働概念は、「労働の一定の社会的形態から生ずる労働の一規定」（*Mehrwert*, S. 445）あるいは「一定の社会的生産関係を表わすにすぎない…属性」（*Ibid.*）であるのに反して、商品に固定される労働という第二の規定は、労働が実現されるさいの対立的な社会形態を内蔵していないため、資本主義的な規定性をあらわす生産的労働の第一の規定と抵触する。「ここでは、われわれは、形態規定から、すなわち、生産的労働と不生産的労働とが資本主義的生产にたいしてもつ関係によって規定することから、逸脱する。」（*Ibid.*, S. 448）

以上、本節で、スミスが資本を生産する労働という資本主義での生産的労働の正しい規定をうちたてた半面、資本を生産する労働と商品を生産する労働とを二重うつしにみる弊害におちいった事実を確認した³⁾。マルクスがスミス批

判のカードをきったのは、商品を生産する労働は直接には剰余価値を含んでいないからである。

- 1) 「交換価値と発展した流通とが前提されている近代的生産」(*Grundrisse, MEGA, II/1・1, S. 179*)とか「価値は資本の基礎をなす」(*Ibid., MEGA, II/1・2, S. 334*)あるいは「交換価値を土台とする生産」(*Ibid., S. 582*)または「交換価値にもとづく生産様式」(*Ibid., S. 708*)などの表現は、資本が単純流通を論理的前提としてなりたつ関係を意味する。また、「交換価値によって支配されている生産様式」(*Mehrwert, MEGA, II/3・4, S. 1247, 圏点—マルクス*)とか「交換価値による生産の支配」(*MEGA, II/3・6, S. 2256*)または「交換価値を目的とし交換価値によって支配される生産」(*Ibid., S. 2145 f.*)という表現は、直接「資本に立脚する生産」(*Grundrisse, S. 510*)つまり資本主義的生産そのものをさす。
- 2) *Kapital, III, S. 886f.* 参照。
- 3) スミスによる生産的労働の二つの規定の混同は、個人的所有と資本主義的所有という二つの相異なる私有が峻別されない点で、資本主義の基礎上で社会的分業と工場内分業の無区別と同一の性格をもつ。

3 二つの規定の混同理由

前節で、スミスによる生産的労働の二重規定を確認したうえで、その第二の規定は労働が実現される資本主義的生産関係を表現しない理由をといた。それでは、スミスは、なぜ資本を生産する労働と商品を生産する労働との同等性を想定したのであろうか。本節では、スミスがなぜ二つの規定を混同したかその根因を分析し、二つの規定の同一視はスミス分業論の凝縮された表現である事実をつきとめる。

生産的労働の二つの規定の混同とは、単純な商品生産と資本主義的生産との混同等価である。スミスに二つの生産形態の区別がなかった事実については、マルクスが再三強調した事柄であった。「アダム・スミスは商品生産一般を資本主義的生産と同一視している。」(*Kapital, II, S. 387*)「スミスは資本主

義的生产をやはりまだあちこちで直接的生産者のための生産と混同している。』(『直接的生产過程の諸結果』, 488 [原] ページ) それでは、スミスにはなぜ二つの相異なる生産形態の区分が存在しないのであろうか。結論を先回りすれば、スミスにあっては、労働生産物の商品への転化は同時に剰余価値の生成をとまなうからである。スミスにとっては、商品生産は剰余価値形成と不可分の関係にたち、独立生産者は、商品生産によって同時に剰余価値を創造するのである。それは、以下のような根拠からである。すなわち、スミスによれば、初期未開の社会において労働者は、自給自足の経済をいとなむ一方、蓄積財源の生産にはたずさわらない。「分業がなく、交換もめったにおこなわれず、あらゆる人が独力であらゆるものを調達するという社会の未開状態においては、その社会の業務をおこなうために、資財があらかじめ蓄積されたり、貯えられたりする必要はまったくない。』(『諸国民の富』 I, 258 [原] ページ) ところが、人間は、本来、各自が得意な領域の労働に特化してその生産物を取引する方がおたがいの利益になるという交換本能をもつ。そこで、人々は、労働生産物の商品としての交換と同時に特定の特殊の労働に専門化し、ここに各商品生産者のあいだでの分業が深化発展するが、じつは分業がなりたつには、各人の生産物の販売までに要する生産財や消費財からなるストックの蓄積が先行しなければならない。「職工が自分の特殊の業務に専念できるのは、自分の織物が完成されるだけでなく、売られてしまうまでのあいだ、自分を扶養し、その仕事の材料や道具類を供給するにたりる資財が、自分の所有としてであれだれか他の人のそれとしてであれ、あらかじめどこかに貯えられているばあいだけである。』(『諸国民の富』 I, 同ページ) スミスにあっては、分業はストックの蓄積を物質的な基礎となしつつ交換本能にうながされて成立する。労働者が自分の欲望を他人の生産物で充足する割合が大きくなればなるほど、特殊の労働の専門的な細分化である分業の発展によって労働生産力が増進する。労働生産力の増大は、労働日不変の前提上では¹⁾、労働者の消費財源の生産にかかる労働分量を短縮せしめ、蓄積財源を本格的に形成する。その蓄積財源が含む剰余労働は、商品交換によって剰余価値にあらわされるから²⁾、独立生産者は、商品生産によって同時に剰余価値を創出する。スミスにあっては、商品を生産する労働は、

剰余価値をうむ労働支出として以外にはありえない。商品生産者間での社会的分業³⁾は剰余価値形成を同時にともなうことが生産的労働の二重規定のあいだの「隠された思想的な結びつき」(*Mehrwert*, S. 508)である。

だから、スミスにとって、資本を生産する労働をもって資本主義での生産的労働となす規定は、商品を生産する労働という規定と皆既日食の太陽と月のように完璧に重なりあう同じ概念にほかならない。スミスが単純な商品生産と資本主義的生産とを混同したのも、労働者が生産条件を所有するさいすでに剰余価値を創造するとみなす考え方に起因する⁴⁾。ちなみに、スミスにとっては、独立生産者と資本家とのあいだには、ストックの蓄積の量的な違いつまり資産の大小の違いがあるにすぎない⁵⁾。「織工または靴屋のような独立の職人が、自分自身の仕事のための原料を購入したり、その所産が売りさばけるまで自分を扶養したりするのにたりるよりも多くの資財を獲得したばあいには、その仕事によって利潤をあげるために、かれはこの剰余で自然に一人またはそれ以上の日雇職人を雇用する。この剰余が増加すれば、かれは自然に自分の日雇職人の数を増加させるであろう。」(『諸国民の富』I, 71 [原]ページ)独立生産者と資本家とは、ともに剰余価値創造といういとなみの同一性をもつがゆえに、その蓄積にもとづく資産の大小によってのみ区別されるにすぎない。独立生産者と資本家とのあいだに資産の量的な違いしかないのは、個人的所有と資本主義的所有との概念的無区別にひとしい。「経済学は二つの非常に違う種類の私有を原理的に混同している。」(*Kapital*, I, S. 792)資本主義的生産を前提すれば、社会的分業と工場内分業とは個人的所有と資本主義的所有という二つの私有の表現として区分され、両者のあらかず生産条件の所有関係は峻別されるのに反して、スミスにあっては、同じストックの増加は、社会的分業にも工場内分業にも一様に両者の発展の推進力として作用すると理解され、両者の差異は指摘されない。「資財の増加は、労働の生産諸力を増進させ、より少量の労働でより多量の所産を生産させる傾向がある。多数の労働者を雇用する資財の所有者は、自分自身の利益のために可能なかぎり最多量の所産を生産しようように、仕事を適当に分割し配分しようと努力する。…ある特定の工場における労働者 (the labourers in a particular workhouse) のあいだにおこること

は、同じ理由から、一大社会における労働者（those of a great society）のあいだにもおこる。かれらの数が多くなればなるほど、かれらはますます職業のさまざまな部門や小部門に自然に分れる。」（『諸国民の富』 I, 88 [原] ページ）ここで、「ある特定の仕事場における労働者」と「一大社会における労働者」とはそれぞれ工場内分業と社会的分業の表現であると思われる。要するに、スミスには個人的所有と資本主義的所有との区別がない帰結として、その区別が剰余価値生成に結実する因果関係いかに識別されないのである⁶⁾。

以上、本節で、スミスによる生産的労働の二つの規定はなにを表現しているかを分析し、商品生産は、スミスにあっては原理的に剰余価値創造を内包するため、商品を生産する労働は資本を生産する労働と背中合わせになる両規定の内面的な同一性をといた⁷⁾。生産的労働の二つの規定はスミス分業論の問題性をうつしだす鏡である。

- 1) 「労働日を一つの不変量として取り扱うアダム・スミス」(*Kapital*, I, S. 563)。
- 2) 重農主義にくらべたスミスの剰余価値論の進歩は、価値実体を労働にもとめることによって、剰余価値を自然の贈りものから解放し剰余労働に還元したところにある(*Grundrisse*, S. 245, *Mehrwert*, MEGA, II / 3 · 2, S. 375)。だから、スミスが剰余価値の源泉を認識していたというマルクスの評価(*Ibid.*, S. 372)は、剰余価値の剰余労働への還元にかかわる。剰余価値の剰余労働への還元は、直接には剰余価値の存在を所与の条件として出発する相対的剰余価値論を前提になりつつ。スミスに絶対的剰余価値論は存在しないのである。スミスは、剰余価値を利潤から区別された独自の一般的範疇としてといていない(*Ibid.*, S. 372, S. 375)。
- 3) スミスに協業という観点がうすいのは、労働生産力がなによりも商品生産者間での社会的分業によって増進するという考え方に起因する(内田義彦『増補経済学の生誕』未来社、1962年、231ページ)。
- 4) 生産的労働の二重規定は独立生産者と賃労働者とが混在する当時の社会状態の想定によるという見方がある。しかし、スミスには労働者からの生産条件の分離にかんする明確な認識がなくても、資本家による雇用関係がなりたつかぎり、生産的労働の二つの規定は賃労働者というただ一つの問題対象からうまれる。

- 5) 羽鳥卓也『「国富論」研究』（未来社，1990年）第4章第4節に、生産条件の所有の面からのスミスによる独立生産者と賃労働者の混同の例証がある。
- 6) したがって、生産条件の所有の面からの両者の区分は、それが労働者の再生産の内容の相違したがってまたその両者による剰余価値創造の区別につながって完結する。
- 7) 利潤を資本家の労賃とみなしその費用分まで工業生産物の価値形成を認める重農学派の考え方にたてば、工業生産物をつくる労働は単なる価値を形成する労働と翻訳できる。第二の規定が一面重農学派への依存によるというマルクスの文言（*Mehrwert*, S. 448 f.）は、工業部面に剰余価値形成を認めない重農学派への傾斜と第二の規定とが重なりあう関係にたつことを副次的に指摘したものである。

4 先行研究の批判的検討

前節で、スミスが概念上相異なる生産的労働の二つの規定を同一視した根本原因はその分業論にある事実をつきとめた。ところが、先行研究では、剰余価値の秘密に立脚してマルクスがくわえたスミス批判の含意が不明確なため、第二の規定が資本主義での生産的労働として正当な第一の規定と抵触しない旨説明する有力見解がふるいにかかっている。第二の規定が第一の規定と前後撞着しないという主張は、マルクスに独自の剰余価値の秘密を等閑にふしてスミス分業論の立場に回帰するにひとしい。そこで、最後の本節では、二つの規定を同等とみる一部の軽視しがたい見解をフィルターにかける。

一部の見解¹¹⁾によれば、まず「商品資本をつくる労働と、商品をつくる労働とがゴツチャにされているという意味では」（内田『増補経済学の生誕』、316ページ、圏点-内田氏）文字どおり「混乱」（同上、313ページ、314ページ、316ページ）をあらわすとおさえたいうえで、つぎに「問題は第二の規定すなわち、商品に固定する労働、あるいは価値を存続する労働というのが何であるか」（同上、316ページ）と問題提起され、二つの規定の統一的な理解には「価値を存続するということの意味を理解することこそが重要である」（同上、319ページ、圏点-内田氏）として、第2編第3章とともに生産的労働の概念

にふれた第4編第9章での重農学派批判の文言に着目される。たとえば、以下の一文がそれである。

「とくに工匠と製造業者は、世人のふつうの理解ではその勤労が土地の粗生産物の価値をひじょうに増加させることになっているが、この体系（重農学派——頭川）ではまったく不妊的で生産的な階級の人々だ、と主張される。かれらの労働は、かれらを雇用する資財だけをその通常の利潤とともに回収するにすぎない、といわれる。…かれらの雇主は、かれらを雇用するのに必要な原料、用具および賃銀からなる資財をかれらに前払いするように、自分の生活に必要なものを自分自身にも前払いするのであって、かれはこの生活維持費を、かれがかれらの所産の価格からあげられると期待する利潤にだいたい比例させる。…それゆえ、製造業者の資財の利潤は、土地の地代とは異なり、利潤をえるために支出されなければならない全支出を完全に払いもどしたあとにこの純生産物ではない。農業者の資財は、親方製造業者のそれと同じくかれに利潤をもたらすほか、別の人にも地代をもたらすが、親方製造業者はそれをもたらさない。それゆえ、工匠や製造業者を雇用し扶養するのについやされる支出は、もしこういってさしつかえないなら、それ自体の価値の存在を継続させるだけであって、新しい価値をすこしも生産しない。したがって、それはまったく不妊的で生産的な支出である。」（『諸国民の富』Ⅱ，164—5〔原〕ページ，圈点—頭川）

そして、一部見解は、さらにつづく。重農学派では、みられるように、生産活動中に消費される資本家の生活維持費も生産手段や労働者の消費財とならぶ投下資本部分を構成してストックがそのまま資本に含まれる結果、製造工の労働は投下された資本の価値を存続させるだけの労働とみなされ、それをこえて地代をうむ農業労働と区別される。しかし、スミスによれば、重農学派には、ここでの「資本価値の存続」に剰余価値創造が含まれる事実の取り違えがある。そこで、スミスは、工業に従事する労働にかんして、資本家自身の生活維持費を含む「資本価値の存続」という重農主義の用法にしたがったうえで、「ここでは必要労働のなかに、資本家の維持に必要なそれまでもが含まれている」（内田『増補経済学の生誕』，321ページ）こと、したがって「価値が維持され

るにすぎないことは、労働者が剰余価値をつくりだしたことを否定するのではない（同ページ）がゆえに、製造工の労働を不生産的労働とみなす重農学派が批判されていると主張される。つまり、「価値を存続する労働」といってもストックと資本との混同から生産的労働を勘違いした重農主義批判のためその用法にならただけで、そこに剰余価値形成が含まれるのだから、じつのところ、「スミスの第二の規定は、重農主義の内在的批判という意図から書き記された規定だった」（羽鳥卓也『「国富論」研究』、162ページ）。だから、「第二の規定は、けっして第一の規定と矛盾・抵触するものではなかった」（同上、163ページ）ことになる。

しかし、一部有力見解にたいして、初歩的な疑問がうまれる。

まず第一に、一部見解は、重農学派批判の文言を典拠にして、第二の規定には剰余価値形成が内包ずみと判断して第一の規定との同一性を主張されるが、スミスにとって商品を生産する労働が剰余価値をうむのはすでに第一の規定が明示する事柄だから、ここでは問題の所在認識が根底から問われる。つまり、一部見解は、スミスによる商品のなかの剰余価値認識が既知の前提であるのにそれをあらためて指摘してみせる点で同義反復のそしりを免れない。詰めるべき問題は、スミスが商品をつくる労働という第二の規定をもって、なにゆえ剰余価値をうみだす労働という第一の規定と同じだとみなすかそのゆえんの特定にある。生産的労働の二重規定が含む問題性とは、スミスにとって商品のなかの剰余価値認識を既定の事実としたうえで、剰余価値をうむ労働と商品をつくる労働という二つの相異なる規定の等置にある。そもそも一部見解にあっては、資本を生産する労働と商品を生産する労働とはなぜ区別されるべきかふみこんだ説明がみあたらない。スミスの主張の吟味以前に、原理的に商品をつくる労働と剰余価値をうむ労働をなにゆえ峻別すべきかを最初に確定すべきが本来のすじみちである。一部見解では、生産的労働の二重規定がはらむ問題認識そのものが疑われる。

第二に、一部見解にかんして、商品を生産する労働は同時に剰余価値をうむ労働として存在するというスミスと同じ固定観念の共有が推量される。つまり、生産的労働の二重規定がはらむ問題認識がないのは、主張者にとって両

者が概念的に同一だからにはかならない。マルクスにあっては剰余価値をうむ労働と資本をつくる労働とは賃労働者にのみ妥当する同一労働として商品をつくる労働と一線が画される半面、一部見解にあっては、独立生産者による商品をつくる労働は剰余価値をうむ労働とみなされるのに資本をつくる労働とは区別される。一部見解では、商品が資本のもとで生産されるか否かは、商品に剰余価値が含まれるか否かという区別として分別されない。第二の規定には剰余価値形成が前提ずみという主張は、独立生産者による剰余価値創造を推論させるが、「財産所有者による剰余生産物の取得という、私有財産制度の共通な事項」（内田義彦『資本論の世界』岩波書店、1966年、79ページ）あるいは「労働時間が必要労働時間と剰余労働時間の両方を含むということは…歴史貫通的なことから」（同上、143ページ）という文言から、独立生産者は賃労働者とひとしく剰余価値をうみだすという理解がうらづけられる。だから、スミスと同じように商品は一義的に剰余価値を含むと理解すれば、生産的労働の二つの規定にある混乱を説明することはできない。一部見解は、剰余価値形成を独立生産者にもみいだす帰結として、マルクスによる批判に背反してスミス評価に反転したにすぎない³⁾。一部見解による生産的労働のスミス評価は、剰余価値形成を独立生産者にも認めるスミスと同じ基本前提に胚胎する。一部見解には、独立生産者による剰余価値創造にかんしてスミスとマルクスの相違認識がもともと存在しないのである。

以上、本節で、マルクスの批判に背反して、スミスによる生産的労働の二重規定のはらむ問題性を否定する一部見解を検討し、その根底には剰余価値の秘密にかんして古典派への逆もどりがある事実を批判した。マルクスが二つの規定のあいだに亀裂をみいだすのは、スミスによる重農主義批判を十分に勘案していないため³⁾でなく、剰余価値創造の特殊歴史性認識にたちスミスと対立的な立場にたつ事実に淵源をもつ⁴⁾。スミス評価の吟味をうけたマルクスは、ふたたび岩のようにしずかである。

- 1) これは、内田義彦『経済学の生誕』（未来社、1953年）を嚆矢として、さらに羽鳥卓也『古典派経済学の基本問題』（未来社、1972年）によって補強された議論である。
- 2) 内田氏の所説がのちに羽鳥氏によって補強される過程は、同時にその純化の過程でもあった。内田氏は、マルクスのスミス批判の存在からまず二つの規定の混乱にふれ、すぐそのあとで両者の整合性に積極的にときおよぶという議論を展開される一方、羽鳥氏の場合、内田氏の所説の基本性格にしたがって終始二つの規定の統一性を論じてマルクスへの反批判で切り返される。
- 3) 羽鳥卓也『「国富論」研究』152ページ。
- 4) 価値を形成する労働としての第二の規定は、資本家の労賃とみなす利潤部分までの商品の価値形成をとく重農学派の工業生産物にかんする考え方と結果的に調和する。第二の規定の重農学派への依存にかんするマルクスの文言（*Mehrwert*, S. 448 f.）は、第二の規定成立にとってほんすじの説明ではない。

む す び

本稿で、スミスがなにゆえ生産的労働の二つの異質な規定を混同したかを分析して、その究極の原因は、商品生産者間での社会的分業にともなう剰余価値形成をとく分業論に隠されている因果をさぐりあてた。賃労働者による剰余価値創造をみちびくマルクスの立場にたてば、生産的労働の二重規定にたいするスミス批判がなりたつ半面、剰余価値形成を独立生産者にも認めればマルクスのスミス批判はなだれをうってくずれる。スミスの生産的労働にかんする問題は、剰余価値形成を賃労働者にのみ認めるか否かの論点にひとしい。

ひるがえっていえば、蓄積された労働は概念上剰余価値をうむ資本と区別されるから、両者を同じとみなした古典派¹⁾への批判は正しい。蓄積された労働の自己増殖する属性は、生産条件が労働者にたいして排他的に所有される特有な生産関係に起因する。古典派には、剰余価値の秘密を資本の素材的な属性にみいだす取り違えがある。一方、20世紀をすぎた現在、賃労働者の再生産と生産条件を所有する労働者の再生産とが区別されない通弊のため、労働力の再生産が労働者の再生産として一般化され、剰余労働創出は労働力の素材的な

属性に転化される。剰余価値の秘密を、古典派は資本のもつ物質的な属性にみいだしたとすれば、今日では労働力の素材的な属性に発見される²⁾。古典派から今日へは、特有な生産関係の封印のまま貨殖の秘密が資本の素材的属性から労働力の物質的属性へと移されたにすぎない。ここに、刊行後130年以上になる『資本論』研究のちょうちんに釣鐘のたとえのような現状がある。対立的な生産関係を心柱とするマルクスの剰余価値論は、天をつく前人未到の高峰として遠方にそびえたっている。剰余価値論は、独創性の面で『資本論』のなかでもきわだった特異点である。

- 1) 「経済学者たちは過去の労働を資本と同一視する。」(*Mehrwert*, *MEGA*, II / 3・4, S. 1409, 圈点-マルクス)
- 2) 「労働力なる商品は、剰余価値を産み出すといふ一種の特徴を有して居る。その理由は、元来人間なるものは、自己の消費するよりも遙に余分のものを生産する力を有するからである。」(河上 肇『近世経済思想史論』岩波書店, 1920年, 270ページ)